



Column

楽あり 苦あり ——農業体験の受入現場から——

千葉 修

日頃農業に接していない都市の住民（に限らないのだが）や学校児童のため、農作業が体験・学習できる機会を作ることが、民間・行政双方から推進されている。‘農業知らない度’が高い人にとって田畑や畜舎は異体験ワールドである。慣れない手つきの農作業で失敗したり、泥汚れになることも楽しい経験となる。一方で、受け入れ側は、参加者の事故の防止や、圃場・作物・家畜への影響等々の気配りが必要となる。

農作業の体験と言っても、まねごと程度から援農労働として戦力になるレベルまで幅がある。かの草刈り十字軍では、大変厳しい援農（林）作業にもかかわらず、志願者が絶えない。参加者に重労働でしょう、と尋ねて、自由労働ですと答えられた話もあるらしい。

長野県でリンゴを産直販売する一農家の場合、消費者交流における農作業体験の指導では小言も口にする、という。生産者・消費者は取引では対等、現場では生産者が上位なのだから。もちろん、相互に遠慮無用の信頼関係ができていればの話。食べ物を作る人、それを支援する人、そのまたサポートをする人と、円環の関係ができてくる。

最近調査した宮崎県のS農協では、民宿して農業体験をする人のために、青年部が「ふれあい農業支援隊」を組織している。当地の農業の基幹はピーマン・キュウリ・肉牛であり、「ふれあい農業」は次の要領で3泊4日（または2泊3日）の日程で行われる。

対象となるのは20歳以上の独身女性。参加料は1名5,000円（全日程の宿泊・食事代・諸経費の合計）。交通費は1名当たり上限

30,000円をジョセイ（！助成）。

体験メニューは、農作業（たとえば茶の手揉み、カンショ・マンゴー・イチゴ・ピーマン等の収穫と出荷）、郷土料理の実習、圃場・施設・畜舎の見学、トラクターの試乗、親睦会（会食）などで、受け入れ農家と青年部が付きっきりでサポートする。なお、近場には神話時代の遺跡等の観光スポットもある。

平成14・15年度の参加者は関西中心だったが、そのアンケート結果を見ると、農業に無知で身勝手な消費者だったのを反省した、自然の神秘を感じた、農産物はスーパーでいつでも買えると思っていたが、農家の苦勞を知って意識が変わった、等の感想が述べられている。民宿については、農家の家族の優しさや、人と人とのつながりの深さが印象的だったとされ、食べ物では特にマンゴーの味が好評を博した。

全体として、農業体験・農家民宿とも参加者全てから満足した、参加料も安いという回答が得られた。ただ、自由記入欄に、お客様として大事にされ過ぎた、もっと「こき使って」ほしかったという意見があったのには、地元側も苦笑させられている。

この事業が目的とする、農業と工業の生産の違いの認識、田園の癒し効果の体感、ほぼ達成され、当地のファン作りにも成功しているようである。担当者の期待は、これを契機に、将来家庭の「食卓の番人」となるはずの独身女性に、地元産物利用の手作り料理から始めて食生活のあり方、さらにライフスタイルまで見直してもらうという所まで及ぶ。

調査の終わりに、「これまで大学生の参加者が主だったが、今後は広く一般女性にアピールしたい。官庁（特に農林水産省）勤めの女性も是非」と水を向けられた。残念ながら中年オヤジはお呼びではないらしい。

「支援隊」は他に日帰りコースの収穫体験も手がけている。関心を持たれた方は次のホームページにアクセスされてみては如何。

<http://www.ja-saito.or.jp>